



臨床研究部  
からのお便り

## 今年インフルエンザの流行が早いのでしょうか。 第18回

9月26日、「東京都内のインフルエンザ患者報告数が増加し、「流行開始」の目安を上回ったことが25日、東京都感染症情報センターが公表した感染症発生動向調査の週報で報告された。」というニュースがありました。「週報によると、16日から22日までの週の1医療機関当たりの患者報告数は、前週比約13%増の1.06人となり、「流行開始」の目安となる1.0人を超えた。年齢別では、10歳未満が全体の6割超を占めている。保健所管内別では、多摩小平が4.05人で最も多く、以下は、中央区(1.8人)、文京と渋谷区(1.57人)、杉並(1.53人)、世田谷(1.46人)、中野区(1.4人)、板橋区(1.38人)、江戸川(1.37人)、八王子(1.33人)、北区(1.18人)、西多摩(1.14人)などの順だった。インフルエンザは例年12月から3月にかけて流行する。2018年は第49週(12月3-9日)に「流行開始」の目安を超えており、今シーズンの「流行開始」は昨シーズンよりも2カ月以上早い。」と報道されています。

さて、今年は本当にインフルエンザがこれから流行し始めるのでしょうか。この答えはもちろん、今後どうなるかをみてみないとわかりません。基本的にインフルエンザの「流行開始の目安」というのは、定点当たり患者数1.0を超えることとされていますが、これはこれまでの、「過去のデータを20年以上観察したところ、一旦定点当たり患者数が1.0を超えると、その後に下がったことはなく、そのまま増加し続ける」という観察から、そのように決められたことです。ちなみに、感染症法に基づく感染症発生動向調査において、定点当たり報告数というのは、すべての医療機関を平均して、1週間に、一つの医療機関に、インフルエンザと診断された患者さんは何人いたかという数です。つまり、インフルエンザ患者が定点当たり1.0人というのは、一つの地域のほとんどすべての医療機関に平均して、1週間に1人のインフルエンザ患者さんが受診したという意味です。

一方では、このような基準が定められたのは20年以上前のことで、まだ現在のようにインフルエンザの迅速診断キットがない時代ですので、基本的に臨床的な診断に基づいていました。そのころは、病原診断が出来なかったため、真夏にインフルエンザに似た症状だなと思って、それを確かめるすべはありませんでしたので、「まさかね」という感じで診断には至っていなかったこともあります。現在では、迅速診断キットなどを使用して真夏でもインフルエンザの患者さんがいることはわかっていますし、一旦インフルエンザウイルスが集団のなかに入れば、季節を問わず学校とかで集団発生となることもわかっています。

ます。もちろん、地球温暖化でインフルエンザの流行が変わってきたのかもしれませんが、上述の理由で、昔からあったけれども、我々がわからなかっただけかも知れません。



また、日本をはじめとする温帯地域では、冬季に流行しますが、亜熱帯地域では雨季、すなわち6~8月頃と11~2月頃の2回流行があり、熱帯地域では年中散発的にインフルエンザがあることがわかっています。ちなみに、北半球である日本の夏は、南半球では冬ですので、そのときには南半球のオーストラリアとかニュージーランドではインフルエンザが流行しています。そうしますと、南半球の冬に日本に旅行されてきた方は、インフルエンザにかかっている可能性もあるわけで、その方から周囲の日本在住の方にインフルエンザが感染するのは当然あるわけですから、グローバル化した現在、日本で真夏にインフルエンザがあったとしても全く不思議ではありません。

なぜ温帯地域では冬にインフルエンザが流行するのかは、大昔からの疑問ですが、まだ明瞭な答えはできていません。冬は、低温で低湿であるから、インフルエンザウイルスが長生きするからだという説は昔からあり、実際にインフルエンザウイルスそのものは、温度が低いほど、湿度が低いほど長生きするという実験データはあります。しかしながら、現実世界では、亜熱帯地域では雨季、すなわち暑くて、ジメジメした時期にインフルエンザが流行するわけですから、必ずしもそれは当てはまりません。最近の研究では、湿度が低いときには、エアロゾル感染が優位に働き、湿度が高いときには飛沫感染と接触感染が優位に働くので、温帯でも亜熱帯でも、インフルエンザウイルスは、自分たちにもっとも都合の良い感染経路で流行するという説が提唱されています。

ということで、インフルエンザが流行するかどうかは、そのまま人から人への感染伝播が持続していくかどうかですので、一カ所で集団発生して、一次的に患者数が増えることはあるかもしれませんが、それがそのまま全体に広がっていくかです。少なくとも、インフルエンザは、小さな集団発生を繰り返しながら、少しずつ増幅されて、徐々に広がって地域での流行に繋がっていくことは明らかですので、今後の周りの状況に注意しながらみていくことが必要です。おそらく、一度増加した患者数は、しばらくすると一旦減少して、その後寒くなるにつれて、また少しずつ増加していき、冬季の季節性流行に繋がっていくものと思います。(臨床研究部長 谷口 清州)